

取材体験記～ハノイ、ベルリン、そして…

- 「ムッシュKの日々の便り」より -

三無会が2年目を迎えようとした2011年春、東日本大震災が発生し、この1年は、会員が集う機会をもつことができないまま過ぎてしまいました。そんな中、柏倉先生が立ち上げたブログにより、私たちは常に啓発されてきました。今回は、そのブログからいくつか記事を紹介し、三無会報告に代えたいと思います。

ジャーナリストは時代の目撃者といわれるが、それには進行している出来事の現場に合わせなければならない。そして、それが可能となるには幾つもの僥倖に恵まれる必要がある。30 数年の取材生活をかえりみて、そうした僥倖にめぐり合う機会が多かったように思う。

取材の舞台は多く海外だったが、ベトナム戦争の取材を通して鍛えられ、ウォーターゲート事件、第1回ランブイエ・サミット、フランコ総統の死去、サダトのイスラエル電撃訪問、ポーランドの「連帯」の結成、イスラム革命の主導者ホメイニ師のフランス亡命と帰国、ミッテラン大統領誕生、ゴルバチョフの改革、チェルノブイリ原発事故、ベルリンの壁崩壊、湾岸戦争など、特派員として、あるいは東京から特派されて現場で立ち会うことができた。

以下はそれらの内、ベトナム戦争の「第一次和平協定調印」と「ベルリンの壁崩壊」の取材記ほかで、2011年6月から続けているブログ (<http://monsieurk.exblog.jp>) に掲載したものの再掲である。

柏倉康夫 記

ホアビン・ゾイ（平和が来た）～北ベトナム取材報告～

ホアビン・ゾイ(平和が来た)～北ベトナム取材報告 2012年 02月 16日
～

私たちNHK取材班が北ベトナムに入国を果たした1973年1月中旬、ニュースの焦点はベトナム停戦が成立するかどうかにかまっていた。はたして北ベトナム側はどう考えているのか。この点に関しては、ハノイ到着の翌日表敬訪問した際に、対外文化連絡委員会のブ・クオック・ウィ委員長代理がふともらした一言が暗示的であった。「皆さんは本当によい時期においでになった・・・あなた方は、将来きっとよい回想録が書けますよ」。たしかに彼はそう語ったのである。

これに次ぐル・クイ・キ、ジャーナリスト会議長のブリーフィング、外務省情報文化局長ゴ・ディエン氏との単独会見などへの取材を通して、私たちは和平協定調印間違いなしとの確信を得たのだった。

た際に、対外文化連絡委員会のブ・クオック・ウィ委員長代理がふともらした一言が暗示的であった。「皆さんは本当によい時期においでになった・・・あなた方は、将来きっとよい回想録が書けますよ」。たしかに彼はそう語ったのである。

私たち NHK 取材班が北ベトナムに入国を果たした 1973 年 1 月中旬、ニュースの焦点はベトナム停戦が成立するかどうかにかまっていた。はたして北ベトナム側はどう考えているのか。この点に関しては、ハノイ到着の翌日表敬訪問し

これに次ぐル・クイ・キ、ジャーナリスト会議議長のブリーフィング、外務省情報文化局長ゴ・ディエン氏との単独会見などへの取材を通して、私たちは和平協定調印間違いなしとの確信を得たのだった。

前年 11 月 20 日、アメリカの CBS テレビが、アメリカのキッシンジャーと北ヴェトナムのレ・ドク・ト代表との間で、第 1 回の秘密会談が行われたことをスクープした。会談場所はパリの郊外およそ 20 キロのジフ・イヴェットという小さな町にある、画家フェルナン・レジェの持家で、フランス共産党が会合などに使っている長屋風の家だった。このときから両国は停戦にむけて秘密裏に話し合いを重ねていたのだった。

現地時間の 1 月 23 日の夜、私たちは 2 日間のハイフォンでの取材を終えてハノイにもどって来た。3 日間の予定を 1 日早く切り上げて帰ってきたのである。ハイフォンをはじめ、地方でも取材したいものは沢山あった。しかし、ハノイを留守にすることが不安だった。何かがある。私たちの誰もがそう感じていた。それだから真っ暗な夜道を車をとばして帰ってきたのである。

ハノイの宿舎に指定されていたホテル・トンニャットの回転ドアを押して入ると、一種異様な雰囲気がかたよっていた。ハノイに駐在する電波ニュース（この度の取材では電波ニュースのカメラマンに協力してもらっていた）の石山支局長がとんできて、パリで停戦の仮調印が行われたらしいという。私たちはただちに取材に同行している対外文化連絡委員会のグエン・クイ・クイさんに確認を頼んだ。

クイさんはロビーの脇にある電話室へ入っていった。対外文化連絡委員会や外務省に問い合わせられているのだろう。待ちどおしい時間だった。やがて出てきたクイさんは、固い表情でこう言った。

「北ヴェトナム政府はいまのところ何の発表もしていません。したがって皆さんにお伝えすることは何もありません。ただ、外国の取材班のみなさんは、明日の朝 6 時に外務省の前に集合してください。それから空港へ取材にまいります。」

仮調印はあったのか、空港では何を撮影できるのか、いくら尋ねても、「それは分かりません」の一点張りである。普段は柔和で、よく冗談をとこなすクイさんも、こうなったら挺でも動かない。確認の電報を日本に打つことも婉曲に断られる始末である。明日を待つほかなかった。

翌 1 月 24 日午前 6 時。たちこめる濃い朝霧のなかで、外務省の前には 20 台ほどの自動車が集まっていた。報道陣や外国の友好団体の代表が乗りつけた車である。

やがて、外務省の役人が乗った先導車が動き出す。われがちにその後へ車が続く。しかし。連れて行かれたのは空港ではなく、外務省とは通りを一つへだてた大統領官邸であった。

7 時 40 分、大統領官邸の赤い絨毯を敷きつめた大広間では、和平協定調印のためにパリへ出発するグエン・ズイ・チン外相の壮行会が開かれていた。普段の精悍な顔をほころばすファン・バン・ドン首相。重厚なレ・ジュアン党第一書記。死亡説までささやかれていたボー・グエン・ザップ国防相、赤いナポレオンとひそかに綽名されるこの稀代の戦略家が、部屋の片隅で南ヴェトナム臨時革命政府のグエン・バン・ティエン代表と抱きあって

いる。

私たちは夢中でカメラをまわした。歴史的な瞬間だった。報道陣がどっと要人たちを取り囲む。あちこちで乾杯の杯があがる。このとき、杯を片手に近づいて来たファン・パン・ドン首相は私の耳もとで、“Ce qui finit bien, c'est bien. (終わりよければすべてよし)”とささやいた。

午前 10 時 30 分。ハノイの街角はどこも人波で埋まっていた。有線放送の拡声器を中心に幾重もの人の輪ができていく。市内電車もとまり、乗客はみな顔を出して耳をかたむける。建物のバルコニーはどこも鈴なりである。白い顎ひげの要人、緑のヘルメットをかぶった兵士、すげ笠姿の若い女性。やがて北ヴェトナム放送が臨時ニュースで、和平協定の仮調印成立を伝えはじめた。

「レ・ドク・ト特別顧問とアメリカのキッシンジャー博士は、昨日パリにおいて和平協定の調印に・・・」

女性アナウンサーが事実を淡々と伝えていく。

「ヴェトナム民主共和国とアメリカ両国は、この協定がヴェトナムおよび東南アジア、さらに広くアジア全体の和平に貢献するものと信じている。・・・」

赤ん坊を高々とさしあげる若い夫婦、友だちと抱きあって喜ぶ若い女性、うっすらと涙のにじんだ目で拡声器を見つめている青年。この瞬間、四半世紀にわたる戦いに、事実上、終止符が打たれたのである。1 人の子どもが低い声で、「ホアビン・ゾイ (平和が来た)」とつぶやいた。藤井カメラマンがまわすアリフレックスの音にまじって、その声は私の耳にはっきりと聞こえた。

ハノイでは毎朝 6 時には目がさめる。街角ごとに設けられた有線放送の拡声器が鳴りだし、職場へ急ぐ人びとの自転車をこぐ音が部屋まではいのぼって来る。事務所や工場は 6 時半には仕事を始める。デパートもこの時間には開店する。おそらくハノイは世界で一番早起きの都会だろう。私たちも早い朝食をすませると、8 時には取材をはじめる毎日だった。

今度の取材に当たっては、撮影は電波ニュースの協力を得ることが条件となっていた。チーフに藤井カメラマン、日映にいたこともあるベテランである。私たちとともにハノイ入りした石垣氏がセカンドカメラマン。彼はラオスの解放区に入った経験がある。北ヴェトナム側も三人のスタッフを用意しておいてくれた。責任者のクイさん、対外文化連絡委員会の幹部で、独学とは思えないほど日本語が達者である。工作者のルオンさんはディエンビエンフーの戦闘に参加した歴戦の勇士。取材のアレンジを彼が担当する。そして通訳のチューさん。

なにしろ NHK にとっては 19 年ぶりの北ヴェトナム取材である。取材したいものは山ほどあった。最初の打ち合わせ会議で、こちらの希望は伝えてあった。だが、戦時下の北ヴェトナムでは取材制限も多い。またテレビについては未経験のこの国の人びとに、私たちの意図がどれほど理解されるだろうかという不安もあった。

ハノイを訪れた外国人の多くは、トンニャット・ホテルの一部屋を割り当てられる。フ

ランス植民地時代の建築で、かつてメトロポールと呼ばれたこのホテルが、いまでもハノイでは最高のホテルである。寝台から洗面所の部品にいたるまですべてが当時のままである。そのトンニャット・ホテルに、ある日取材を終えて戻ると、それまで見かけたことがなかったロシア人が10人ほど来ていた。男はみなパイロットの制服を着ており、みごとな身体つきの女性たちはスチュワーデスに違いなかった。

ソビエトは何かの目的で特別便を用意したのである。調印のために北ヴェトナムの要人をパリへ運ぶのだろうか。私たちは色めきたった。

だが、取材の結果明らかになったのは、アエロフロートの特別機に乗るのは要人ではなく、桃の花だという。ヴェトナムでは2月3日の旧正月、テトを桃の花を飾って祝う。だが、桃の花は暑い南ヴェトナムでは栽培できない。そのため毎年旧正月間近になると、北から南へ桃の花が空輸されるのだという。しかもこの「桃の特別便」は、どんなに戦火が激しかった年でも中止されたことはなかったという。私たちはここに同じ民族同士が戦うことの一面を垣間見た気がした。

それにしても、なぜアメリカは敗北したのか。ある北ヴェトナムのジャーナリストは、この戦争をヘビー級とフライ級の戦いにたとえた。そのヘビー級がなぜフライ級に負けたのか。理由の一つは、アメリカが高度に発達した工業社会であり、ヴェトナムが典型的な農村社会だったことである。アメリカ政府のさる高官がハノイを石器時代に戻してやると本気で語ったことがある。しかし、ハノイは現に生き残ったのである。

ヴェトナム戦争を通じてアメリカが投下した爆弾は、第二次世界大戦のおよそ3倍、去年の暮〔1972年〕の暮だけでも、広島型原爆の2倍に相当する爆撃が行われたという。これが日本のような都市型社会ならば、経済活動は停止し、戦争遂行能力はたちまち低下したに違いない。事実、ペンタゴンのコンピュータの計算では、そうなるはずだった。しかし、ヴェトナムはコンピュータとは無縁の国であった。なにしろ人口120万のハノイ全市にエレベーターは2基しかなく、しかもそのうち1基は現在このとき故障しているという。それでも人びとは何の不自由も感じずに生活できる国なのである。

北ヴェトナムの経済の基礎は広大な田園にあり、人口の大部分はそこで生活している。さらにハノイに住む人も、必ず田舎に親類を持っている。あれだけの短期間に人口の分散を可能にした裏には、農村社会の結束の固さがあった。アメリカは最後までこの農村社会の思考形式と生活のリズムを理解することができなかった。

ニクソン大統領が、「世界の無法者」ときめつけ、キッシンジャー大統領補佐官が、「まれに見る勇気ある人びと」と持ち上げた北ヴェトナムの人びと。だが、戦いをおし進めたのは、そうした画一的でいわば「顔のない」2千万の集団ではなく、血も涙もある一人一人の人間だったのだ。

グエン・バン・ミンは兵士になる前は学校の教師だった。彼は去年〔1972年〕の7月10日に、ハノイにいる女友だちのホアに宛てて手紙を書いた。だが、この手紙は投函されることはなく、彼の遺体とともに南ヴェトナムのサイゴンに近いビンズオンで見つかった。

「愛するホア、そちらでは、いま甘いジャスミンの花が満開でしょう。夏休みで学校は休みに入ったことと思います。君も授業から解放され、同僚の数学教師、ハイ君と休暇を楽しんでいるのではありませんか。そう思うと僕の心は痛みます。彼はハンサムだし、よい男です。君たちはもう愛の言葉をささやき合ったかしら。ホア、憶えていますか、川のほとりの木陰でねころびながら話し合った時のことを。君の長い髪が僕の頬をやさしくなでた……。君は彼と結婚すべきなのです。」

敵は野蛮で、仲間の多くが殺されました。先週は B52 の猛爆で部隊の半分が死にました。恐ろしさのために、ときどき変な考えにとりつかれることがあります。数千里を一挙にこえて、君のところへ飛んでいく夢です。以前、僕は人を殺すことがどんなことか分らなかった。僕はそれをこの目で見ました。僕は殺したくない。でも、それは兵士としての義務なのでしょう。そこに選択の余地はありません。……」

遺体のなかから見つけられた手紙は、南ヴェトナム軍の手で、北ヴェトナムに送り返されてきたのである。

グエン・バン・ミンと同じような悲劇は、北側にも南にも無数にあった。人びとの悲しみを飲みこんだヴェトナムの地に、はたして本当の平和は訪れるのだろうか。

以上は、40 年前に NHK 報道局編「ヴェトナム和平」に掲載したものを再録したものである。北ヴェトナムとアメリカによる和平協定の本調印は、1973 年 1 月 27 日（現地時間）パリの凱旋門に近いクレベル通りの「国際会議センター」で行われた。これによってアメリカ軍のヴェトナムからの撤退は実現したが、その後南北ヴェトナム軍の間で戦闘が再開され、ヴェトナムに平和が訪れるのは、1975 年 4 月 30 日に北ヴェトナム軍がサイゴンに突入して、やがて統一が実現するのを待たなければならなかった。

（2012-02-16 掲載）

ベルリンの壁崩壊（１）

1989 年 11 月 9 日の夜、東西ベルリンを隔てていた壁が崩壊し、それをきっかけに東ヨーロッパの民主化がはじまった。この日、私はロンドンにいた。この年の 9 月までパリのヨーロッパ総局に勤務していて、前年 1988 年後半から東ヨーロッパ各国で、大きな変革につながる動きがあることを感じていた。

ヨーロッパ総局の建物のテラスには、直径 1 メートルをこすパラボラアンテナが設置されていて、ソビエトを含む東西ヨーロッパ各国の放送局の電波が受信でき、詳細な動きを観察することが可能だったのである。



ベルリンの壁崩壊（1）

2011 年 10 月 31 日



1989 年 11 月 9 日の夜、東西ベルリンを隔てていた壁が崩壊し、それをきっかけに東ヨーロッパの民主化がはじまった。この日、私はロンドンにいた。この年の 9 月までパリのヨーロッパ総局に勤務していて、前年 1988 年後半から東ヨーロッパ各国で、大きな変革につながる動きがあることを感じていた。

ヨーロッパ総局の建物のテラスには、直径 1 メートルをこすパラボラアンテナが設置されていて、ソビエトを含む東西ヨーロッパ各国の放送局の電波が受信でき、詳細な動きを観察することが可能だったのである。

89 年 4 月の 1 カ月間、衛星放送で毎週土曜日、ブダペスト、ワルシャワ、プラハ、さらに東ベルリンから中継番組を放送した。キャスターはパリ在住で、衛星放送のキャスターをお願いしていた岸恵子さん（女優）と小室広佐子さん（現東京国際大学准教授）に交代でつとめもらい、各国の放送局が協力してくれた。

89 年 4 月の 1 カ月間、衛星放送で毎週土曜日、ブダペスト、ワルシャワ、プラハ、さらに東ベルリンから中継番組を放送した。キャスターはパリ在住で、衛星放送のキャスターお願いしていた岸恵子さん（女優）と小室広佐子さん（現東京国際大学准教授）に交代でつとめもらい、各国の放送局が協力してくれた。

9 月に一度東京に帰任したあと、変化が予感される東ヨーロッパを取材すべくチームを組み、11 月初めに、西ベルリン、ポーランドのワルシャワ、パリへ送り込んだところだった。私自身は、作家で、かつてイギリスの諜報機関 MI6 で働き、東側の情報に詳しいジョン・ル・カレ（John le Carré、本名 Davide J.M. Cornwell）を口説いて、ベルリンの壁の前でインタビューをするために、成田を発って 9 日の夕方ロンドンに着いたところだった。

時差の関係で早めにホテルのベッドに入り、うとうとしていたとき枕元の電話が鳴った。西ドイツのストリンガー（通信員）ハンスからの電話で、「ベルリンの壁が壊れた、すぐにテレビを見る」という。テレビをつけると BBC が西ベルリンからの中継をやっており、壁に設けられた検問所をこえて西ベルリンに入ってくる人たちの姿を映し出していた。午後 9 時をまわったところだった。

翌 10 日早朝、ベルリン行きの英国航空の席を何とか確保して現地に入り、前夜パリを車で発ったクルーと合流して取材を開始した。

11 月 9 日に東ドイツ政府のスポークスマン、シャボフスキーは午後 6 時過ぎから行った記者会見の最後で、「一般市民の西側への旅行の自由を認める」と発表し、「いつから実施されるのか」という記者の問いに、「今から直ちに（ab sofort）」と答えていた。だがこれがまったくのハプニングだったことは後の取材で分かったのである。その証拠に、西ドイツのコール首相はこの日ポーランドを訪問中で、ワレサ大統領との会談をとりやめて急遽帰国したほどだった。

10 日も朝から、東ベルリン市民たちが次々に検問所を通して西ベルリンに入ってきた。そんな中に父親に連れられた 2 人の女の子を見つけた。彼女たちが先ず驚いたのが果物屋の店先でバナナを見たときだった。聞けば東側では冬にバナナを見かけることなど絶対がないという。1960 年にベルリンの壁が築かれて以来、離れ離れの親戚を訪ねたいということだった。

それから数日すると、西ベルリンの壁際にゴルバチョフの等身大のパネルがいくつも並べられるようになった。ベルリンの壁崩壊という歴史の大転換をもたらした要因の一つがゴルバチョフ書記長の決断だったことを西側市民はよく分かっていたのである。

壁が開放された直後から、若者たちが壁によじ登り、壁をハンマーで叩く姿が見られた。間もなく壁の数カ所に人が通れるほどの穴があけられ、そこから東ベルリンへ潜入することができるようになった。私も穴を潜り抜けたが、長きにわたって東西を隔ててきた厚さ 1 メートルをこす壁の中は空洞だった。

こうした様子取材していると、金槌をもった 7、8 歳の女の子が、これを貸すから煙草をくれとやってきた。煙草は吸わないので、小銭と交換に金槌を借りて壁を壊した。だが持ち帰ったベルリンの壁の破片はいつのまにかなくなってしまい、いまはニューヨークに住む知人の陶芸家が、茶碗の底に焼きこんでくれたものだけが残っている。

この日から 1 カ月、寒さの厳しいベルリンをはじめ、東ヨーロッパ各国を取材してまわった。歴史の歯車が大きく回っているのを実感する毎日だった。

(2011-10-31 掲載)

ベルリンの壁崩壊 (2)

ことの発端は、ハンガリーでの環境破壊反対の小さな動きだった。

ドナウ川はスロバキアから国境をこえてハンガリーへと流れるが、両国はドナウ川の航路の改修、水力発電所とダム建設について協定を交わした。スロバキアは上流のカプチコヴォに、ハンガリーは下流のナジマロシュにダムを建設する計画で、工事は一般には知らされないままひそかに進められた。だが 1980 年になって事実を知ったジャーナリストのヤーノス・バルガが、雑誌「ブパール」に、ダム建設がドナウ川の破壊につながるとの警告記事を発表し、友人の映画監督が厳重に警備された工事現場を撮影することに成功した。やがてこれがダム建設を中止させ、さらには共産主義政権を倒壊に追い込む運動のスタートとなったのである。

私たちの取材に対して、ヤーノスはダム建設に反対した理由を、「スロバキアに出来る予定のダムによって、ドナウ川がハンガリーへ流れ込む地帯にひろがる河川沖積湿地帯の地下水の水位低下をまねき、生態系に悪影響をあたえることが分かった。さらにこれによって 15 万ヘクタールの森が水に沈み、川の流れが遅くなるため、大量の沈殿物が発生して水源として使えなくなることが分かったからだ」と語った。

ドナウ川はブダペスト市民をはじめ 500 万人の飲み水をまかなってきた。しかし「青きドナウ」と讃えられた川は褐色に濁り、この頃になると水道の水源を遠く離れた山地に求めざるをえない状態となっていた。

ヤーノスの論文が雑誌に載ると露骨な弾圧が加えられた。素人の調査に基づくもので科学的根拠を欠くとして、以後論文の掲載は妨害され、ヤーノスには監視がついた。しかし彼はあきらめなかった。ジャーナリストの職を辞し、環境問題の勉強を始めるかたわら、1984 年 2 月に、「ドナウ・サークル」という団体をつくり、地下出版物を発行して支持者を増やしていった。

ベルリンの壁が崩壊する以前、東欧諸国の環境破壊はどこも深刻な状態だった。しかし共産主義政権下では、西側に追いつき追い越せのスローガンのもとに、それは無視されていた。

ベルリンの壁が開かれてしばらくすると、西ベルリンの空気が臭くなった。原因は青い排気ガスをまきちらして走りまわる排気量 595cc のプラスチック製のトラバントなど東ドイツ製の車だった。排気ガス浄化装置をつけていない上、ガソリンの質が劣悪で、空気はたちまち汚染されてしまったのである。

チェコの首都プラハから北へ 80 キロ、東ドイツとの国境に近いモストは東側でもっとも汚染された街といわれた。街の運命が一変したのは、近くから褐炭の層が発見されたときからである。これがチェコ最大のエネルギー源とされ、街の近くには巨大な露天掘りがい

たるところで行われた。褐炭は石炭のうちでも炭化度が低く大量に掘り出す必要があり、しかも層が薄いために採掘場はどんどん移動する。その度に畑や森がつぶされた。ついに露天掘りの現場がモスト市に迫ると、市街そのものが3万5千人の住民もろとも移転することになった。新たに作られたモスト市は人口が7万人に増え、周辺に褐炭を利用する火力発電所、重化学工業の施設が続々建設され生産が競われた。その結果がすさまじいばかりの大気汚染である。北ボヘミア地方だけで年間凡そ100万トンの二酸化炭素が排出された。

モストからさらに北へ20キロほど行った森林地帯では、木々が白骨のように白く立ち枯れていた。向いの山でも背後の山でも、枯死したモミの木が幽霊のように立っている光景は異様だった。しかも白骨化した森は延々百数十キロにわたって続いていた。酸性雨の被害なのは明らかだった。

モミは「ボヘミアの女王」と呼ばれ、名高いチェコ製ヴァイオリンの貴重な材料だが、こうした被害が材料の確保に影響をあたえているということだった。これらの東側の環境破壊は壁崩壊後の取材で分かったことで、「文藝春秋」1990年9月号に、『壁のむこうの』環境破壊」と題して書いた通りである。

話をドナウ川的环境汚染に戻せば、ヤーノスたちは「ドナウ・サークル」という環境保護団体を立ち上げて、運動は次第に市民の関心と呼ぶようになった。彼らはダム建設中止を政府に要望し、ドナウ川と恐竜の名前をもじった「ドナザウルス」と題した活動の記録をビデオにした。これは共産主義政権下では公開を禁じられたが、やがてビデオ・レンタル店にも置かれるようになった。

最初は百人規模だったデモが、千人、1万人と集まるようになり、1988年夏には10万人をこす人たちが、「ダム建設の是非を国民投票に」と叫んで行進した。これは1956年の「ハンガリー動乱」以来最大のデモとなった。そして10月、盛り上がる世論を押さえきれずに、国会でダム建設の是非を問う議論がおこなわれ、投票に際しては19人が反対、31人が棄権した。政府の政策には満場一致の賛成が原則の国会で公然と反対の声があがったことは体制側に強い衝撃をあたえた。

ハンガリーでは、東ヨーロッパ経済相互援助機構（COMECON）の国以外に、西側との貿易が盛んに行われて市民は比較的豊かな生活を送っていた。共産主義政権下でもブダペストの幾つかの有名レストランでは、白手袋をしたボーイが客たちにサービスし、自慢のトカイ・ワインを味わうことができた。

改革派が実権をにぎった社会主義労働者党は、共産主義とは相いれない株式市場を開設し、個人企業の創設を促進する新たな法律を制定し、固定価格を廃止して自由価格の導入を奨励した。こうした一連の経済改革が政治にも影響をあたえずにはおかなかった。

1989年10月、ハンガリー社会主義労働者党は党名を「ハンガリー社会党」と改め、党内では「複数政党制」を認めるかどうか議論され、東側でははじめてこれを認める決定がなされた。ただ新たに生まれる政党を公式に「政党」と認めることは時期尚早だった。それは一党独裁というマルクス・レーニン主義の大原則に違反することになり、近隣諸国の反発や反対が目に見えていた。そこで彼らは新党の名前に一工夫が加えた。新党を、「・・・

クラブ」。「・・・運動」と呼ぶことにしたのである。

こうして市民の間から先ず「民主フォーラム」というグループが立ち上げられ、最初の政治団体が結成された。これには環境保護の運動を担ってきた人など多くの知識人が参加した。街のカフェでは誰もが「民主主義」について公然と議論していた。

これには前年11月に、改革派のネーメト・ミクローシュが首相に任命されたことが大きくかかわっていた。ネーメトはこのとき40歳。アメリカのハーヴァード経営学大学院（ビジネス・スクール）に1年間留学した経済の専門家で、穏やかな見かけの陰に信念と粘り強さを秘めていた。

ネーメトと二人三脚を組んだポジュガイ・イムレは、対照的に思ったことを口にする人物で、ブダペスト大学で政治社会学を教え、テレビに出演して堂々の議論を展開した。政権の中枢に入って政治改革を担当することになったポジュガイは、「共産主義を変えるときだ」という持論を隠さなかった。一方で党書記長のカーロイ・グロースは、ネーメトやポジュガイが主導する急激な改革には慎重な態度を崩さなかった。

共産主義に終止符を打つのはそれほど簡単なことではなかった。ハンガリーは1958年の苦い経験に悩まされ続けてきた。その年、自由をもとめる市民が武装蜂起して共産主義政権の打倒をはかった。そして武装蜂起を鎮圧するために送り込まれたソ連軍の戦車を相手に、ブダペストで数週間にわたる激しい市街戦が繰り広げられた。この動乱で2万5千人が死亡し、20万人が国外に亡命した。当時のハンガリーの政権も民族主義の立場から蜂起した民衆を弾圧するために手を貸したのである。

ネーメトやポジュガイにとって、この轍を踏まずに改革を実現するには、なによりもゴルバチョフの了解をとる必要があった。彼らは1988年の暮れから89年の初めにかけて、外部の協力を得ることなく、できるだけ目立たないように黙々と変革への準備を進めた。その上でネーメトはゴルバチョフに手紙を送り、3月第1週にモスクワで秘密に会談する約束をとりつけた。ネーメトがこの時期を望んだのは、3月後半にカーロイ書記長が同じくモスクワを訪問することになっていて、それ以前にゴルバチョフの意向をただす必要があったからである。

最初20分の予定だった会談は3時間におよんだ。ネーメトの回想によれば、彼が考えているハンガリーの民主化計画について話すと、不意をうたれたゴルバチョフは、動揺し怒りだしたという。総選挙の実施については、それは社会主義に対して一撃を加えようとするものであり、「そんなことをしたら、正しい社会を創造するという党の権利を踏みにじることになる。その判断を一般大衆に委ねるなんて・・・そんな成り行き任せは駄目です」といった。ゴルバチョフは改革推進派だと考えていたネーメトの予想に反して、彼は根っからの社会主義者だった。だが最後にゴルバチョフは口調を変えると、「しかし、同志ネーメト、その責任者はあなたです。私ではありません」と言った。ハンガリーの進むべき道を決めるのはソ連ではなく、ハンガリー自身だということを意味した。

ネーメトは単刀直入に訊ねた。「もし総選挙の日付を発表し、選挙を実施したら、ソ連は1956年と同じように介入しますか」。ゴルバチョフは一瞬のためらいもなく、「ニエット（いいえ）」と答えた。そして、かすかに笑いながら、「少なくとも、私がこの椅子に坐ってい

る限りは」とつけ加えたという。

1989年5月1日のハンガリーのメーデーでは、首脳たちが並んでパレードを檢分する式典の代わりに、「人民のピクニック」を実施することになった。公園にテントが持ち込まれ、食べ物や飲み物が準備された。党主催のピクニックには数万人の人たちが集う予定だったが、実際には千人しか集まらなかった。閣僚も首相のネーメト以外は誰も顔をみせなかった。

逆に「民主フォーラム」など新たな政党が催した集会には10万人をこえる人たちが参加し、お祭り騒ぎになった。ジャズバンドの演奏の合間には、皆が改革計画について議論し合った。党主催のピクニックでは、書記長のカーロイがネーメトの率いる内閣を槍玉にあげて、社会主義の大義を裏切るものだと言及した。だがネーメトは動じなかった。

翌5月2日の朝、ハンガリー政府は、西隣のオーストリアと接する国境沿いに設置されている電流の通じた鉄条網の一部を切断した。経済的に維持できないというのが表向きの理由だったが、その意図は明らかだった。

ネーメトのこの発言から数時間後、鉄条網を大きな金鋏で切る兵士の写真が通信社の手で配信された。イギリス首相チャーチルが「鉄のカーテン」と称したものが、初めて破られた瞬間だった。

(2011-11-03 掲載)

ベルリンの壁崩壊 (3)

ハンガリー政府がオーストリアとの国境を開けたという情報は、とりわけ東ドイツ政府に衝撃をあたえた。翌3日に開かれた定期会議の席上、書記長のホーネッカーは、「ハンガリーの連中は何をたくらんでいるのだ」と叫んだという。だがホーネッカー自身もハンガリーの意図を十分に分かっており、それだけに強い危機感をいだいた。

夏休みが近づきつつあった。東ヨーロッパの人たちにとって、ブダペストやその北にあるバラトン湖は憧れの避暑地だった。豊富な食品や雑貨が手に入り、大きな湖の湖畔でのキャンプは人気だった。それに加えてハンガリーが西側世界への扉を開いたのである。5月から6月上旬にかけて、数百人が車を国境近くの森林に乗り捨てて、オーストリアへ徒歩で入ろうとしたが、運悪くハンガリーの国境警備隊に発見されてUターンさせられた。それでも国境警備隊の対応はにこやかで、彼らがいなくなると、あらためて国境越えをこころみて成功した人もあった。

この時期に一つの計画が進行していた。アイディアを出したのはハンガリーの活動家メサロシュ・フィレンツだった。ハンガリー人とオーストリア人が国境でピクニックを行って、フェンス越しに食べ物を交換し合い、冷戦の異物であるフェンスの無意味さを世界に訴えようというものだった。彼はこの考えを新たに生まれた「民主フォーラム」のフィレプ・マリアに話した。フィレプはソビエト圏諸国の学生を対象とする一種の「政治的な避難所」を運営しており、国境でのピクニックというアイディアに賛同して、協力を申し出した。

2人はピクニックの名称と場所、開催する日時を決めた。名称は「汎ヨーロッパ・ピクニック」、場所はハンガリー領がオーストリアのなかに食い込んだような地形にある街ショプロン。日時は1989年8月19日午後3時。2人はオーストリア＝ハンガリー二重帝国の支配者の子孫、オットー・フォン・ハプスブルクと党政治局員のポジュガイ・イムレに、この計画のスポンサーになってくれるように話した。

ポジュガイはこの計画が、ハンガリーが国境を開放して共産圏から離脱しようとしていることを世界に知らせる絶好の機会になると判断して、すぐネーメトに話した。ネーメトにも異存はなかった。2人はさらに、これを単なるピクニック以上のものにしたいと考えたのだった。

ただ事は慎重に運ぶ必要があった。ホーネッカーからは、東ドイツの市民が不法に国境を越えようとしたら、逮捕して身柄を引き渡すようと強硬な申し入れがあった。

7月、ヴァカンス・シーズンがはじまると、大勢のんびとがハンガリーに押し寄せてきた。ホテルは満員となり、バラトン湖の周辺や他のキャンプ地には無数のテントが張られるようになった。メサロシュやフィレプは、政党に属する活動家や学生、環境保護団体、市民団体などに協力を呼びかけて、鉄条網を突破する白い鳩（白バラもあった）を描いたポスターをつくり、人びとが集まる場所に貼り出してピクニックへの参加を呼びかけた。そしてピクニックの案内状がハンガリー内外のマスコミにファックスで送られてきた。

ポジュガイは内相のホルバット・イシュトバンに協力を求めた。内相は警察と民兵組織を統括しており、ピクニックの成功には彼の助力が不可欠だった。ネーメト、ポジュガイ、ホルバットはひそかに話し合い、ピクニック当日は国境警備隊がショプロンの現場に近づかないようにすることが決められた。決定は国境警備隊の指揮官ジュラ・コチバを経由してショプロン地区の司令官に伝えられた。

8月19日、ピクニック当日、午後2時ごろにイベントがはじまった。国境近くの草原には主催者の予想に反して、数千人の人たちが集まってきた。オットー・フォン・ハプスブルクの姿はなかったが、彼のメッセージを娘が代読した。やがて人びとが国境のゲートの方へ走り出した。その数は300人ほどで、みな東ドイツ市民だった。

警備隊は命令通りに会場には近づかなかった。検問所にいたのは検問担当の役人だけで、彼らは国境にむかって突進する東ドイツの人たちにあえて背を向けて、オーストリア人旅行者のパスポートを入念にチェックしていた。こうしてこの日、国境を越えた東ドイツ市民は600人を数えた。この模様は西ドイツテレビのZDFやソ連東欧向けに放送しているラジオ・フリー・ヨーロッパが現場から中継して、またたくまに知れ渡った。

「汎ヨーロッパ・ピクニック」の出来事を西ドイツテレビで見たホーネッカーは、東ドイツ駐在のハンガリー大使を呼びつけて激しく抗議し、ハンガリーに留まっている東ドイツ市民を即刻強制送還するように要求した。この段階でハンガリー国内には15万人の東ドイツのパスポートをもつ人たちが留まっていた。

肝心なのは強硬な東ドイツ政府ではなく、ソ連の出方だった。ネーメトたちは待った。それでもソ連からは何も言ってこなかった。「責任者はあなた方だ」と言ったゴルバチョフは、その言を守ったのである。

ネーメトは 3 日後に外相のホルン・ジュラとともにボンへ飛び、コール首相、ゲンシャール外相と秘密裏に会談し、ハンガリーはワルシャワ条約機構との関係を絶って、東ドイツの国籍を持つ人たちが自由に出国することを認めるつもりであることを説明した。そのために西ドイツが、東側から脱出してくる人たちを受け入れる準備をしてほしいと述べた。

コールは感謝の言葉を繰り返し、ハンガリーは見返りに何を望むかときいた。このときネーメトがどう答えたかは分からない。西側のマスコミでは、5 億マルクの信用供与が提供されたという報道もあった。

西ドイツ政府はハンガリーの首都ブダペストにあるブラケット教会の礼拝堂の裏にひそかにオフィスをつくり、そこで西ドイツのパスポートを東ドイツ市民に交付した。この非合法活動は、ハンガリー政府も西ドイツ政府も関与せず教会の神父の自発的意思にもとづく行為ということで実行された。教会の庭には、東ドイツの人たちがテントを張って何日も過ごしていた。その様子を撮影したドイツテレビのカメラが偶然その模様を映していた。そして西ドイツ政府は、オーストリアと国境を接するバッサウに数万人を収容できる大規模な移民センターを建設した。

8 月 31 日、ハンガリー外相ホルン・ジュラは、東ベルリンで東ドイツ外相のオスカー・フィッシャーと対決した。ホルンが、「オーストリアとの国境を完全に開放する」と告げると、フィッシャーは、「ハンガリーは東ドイツを見殺しにして、あちらの陣営に加わるというのか。どういう結果になるか、よく考えてみるのだな」と言い放ち、会談は決裂した。しかしこの数日前、ゴルバチョフはコールに対して、どのような事態が生じてもしソ連は介入しないと通告してきていた。

9 月 11 日午前零時、ハンガリーとオーストリアの国境のゲートが完全に開いた。つめかけていた人や車が検問所を通過して西へ西へと脱出した。この日だけで 8 千人以上の人々が西へ向った。そしてその人数は日ごとに増え、オーストリアからは列車やバスで西ドイツの収容所へ送られていった。

この大脱走の様子は連日西側のテレビで伝えられ、私はそれを見届けて東京へ帰任した。その後の動きはよく知られている通りである。

月が替わって 10 月 2 日、東ドイツのライブチヒでは、「月曜デモ」がはじまり、10 万人が参加した。デモはこの日から連日続けられ、翌 3 日になると、東ドイツは国境を完全に封鎖した。7 日は東ドイツ建国 40 周年の記念日だった。来賓として出席したゴルバチョフは、ホーネッカーを含む東ドイツ社会主義統一党の政治局員との会合の席上、「一歩遅れた者は、その責を一生背負うことになる」と言った。

10 月 18 日、ホーネッカーは失脚し、エゴン・クレンツが後任の党書記長に選ばれた。11 月 1 日、東ドイツはチェコスロバキアとの国境を開いた。しかし民衆の体制に対する不満の動きはおさまらなかった。4 日、東ベルリンで 50 万人をこす人たちのデモが行われ、6 日にはライブチヒのデモは 100 万人に膨れあがった。

11 月 9 日、クレンツは新たな改正案をまとめた。文書には、「旅券を所持している東ドイツのすべての人民は、いつでも、ベルリンを含むどこでも、国境警備のチェックポイント

を通して出国することを認めたビザを取得する権利を有する。旅券を持たない人民も、出国の権利を付与する特別のスタンプを押した身分証明書を所持することができる」と書かれていた。そして党中央委員会はこの改正案を午後4時頃に承認した。実施は翌10日とすることになった。

午後5時頃、スポークスマンのギュンター・シャポウスキーがクレンツの事務所に立ち寄った。彼は前の週から、毎日定例の記者会見を行うことになっていた。中央委員会での議論の経緯を知らないシャポウスキーが、「何か発表するニュースはないか」と訊ねると、クレンツは「こんなものがある」と言って2枚の文書を渡した。クレンツが中央委員会で説明し了承された内容だった。ただそれは翌10日にマスコミに向けて発表するはずの文書で、そこに書かれていた、「ab sofort (今から直ちに)」という文句が、翌日10日を意味することを彼はシャポウスキーに伝えなかったのである。それが故意か不注意だったのかはいまだに分からない。

シャポウスキーは少し離れた会見場へ行く車の中で、一度だけ文書に目を通して会見に臨んだ。彼は記者会見の最後で、この旅行規則の緩和を発表した。そして記者から「いつからか」と質問されて、文書を見直した。そこには「今から直ちに」と書かれてあり、彼はそのまま発表したのである。

クレンツが用意したこの旅行規則の緩和策が、東ドイツの新体制の思惑通りに運んでいたら、事態はどうなっていただろうか。壁が開放されたことに相違はないとしても、それは政権の手で秩序だて行われ、突然の発表に、興奮し、歓喜した民衆の力で壁が突破されて、「崩壊した」ことはなかったはずである。

11月9日の夜に突如出現した衝撃的な映像が、「ベルリンの壁崩壊」というドラマを世界中の人びとに強烈に印象づけ、その後の事態を加速度的に押し進めていったのである。

(2011-11-06 掲載)

携帯写真



リビアでは42年の長きにわたって独裁政治をおこなってきたカダフィ大佐が殺害された。その最後の瞬間は携帯電話のカメラで撮影され、世界中に流布された。昨年暮れから北アフリカや中東を舞台に続いた独裁政権打倒の運動には一つの特徴がある。人びとは携帯やiPhoneなどの端末をインターネットにつなぎ、ツイッターやフェイスブックで仲間と連絡をとりあった。そして写真や動画を撮って、インターネット動画サイトで公開した。

世界中の殆どの人が持っている携帯やiPhoneのカメラは、露出など細かい設定が不要で、いつでもどこでもシャッターを押して、現実を映像として切り取ることができる。街でなにか事が起れば、人びとが一斉に携帯のカメラを向ける光景は日常茶飯で、ネット上には無数の「携帯写真」のホームページが開かれている。そうした携帯写真は1839年にフランスで発明されて以後の写真史にあって、どのような意味を持つのだろうか。

人びとは携帯やiPhoneなどの端末をインターネットにつなぎ、ツイッターやフェイスブックで仲間と連絡をとりあった。そして写真や動画を撮って、インターネット動画サイトで公開した。

世界中の殆どの人が持っている携帯やiPhoneのカメラは、露出など細かい設定が不要で、

リビアでは42年の長きにわたって独裁政治をおこなってきたカダフィ大佐が殺害された。その最後の瞬間は携帯電話のカメラで撮影され、世界中に流布された。昨年暮れから北アフリカや中東を舞台に続いた独裁政権打倒の運動には一つ

いつでもどこでもシャッターを押して、現実を映像として切り取ることができる。街でなにか事が起れば、人びとが一斉に携帯のカメラを向ける光景は日常茶飯で、ネット上には無数の「携帯写真」のホームページが開かれている。そうした携帯写真は 1839 年にフランスで発明されて以後の写真史にあって、どのような意味を持つのだろうか。

かつて NHK の ETV カルチャースペシャル『写真と生きた 20 世紀——アンリ・カルティエ＝ブレッソン 91 歳の証言』（1999 年 10 月 9 日放送）を制作したとき、パリ・リヴォリ通の仕事場で、この伝説の写真家と対談する機会があった。

カルティエ＝ブレッソンの代名詞となった「決定的瞬間」は、1952 年に出版された写真集の英語版のタイトルとして用いられたのが最初で、オリジナルのフランス版は "IMAGES À LA SAUVETTE" であった。このフランス語は「逃げ去る映像」というほどの意味で、それを英語版で、THE DECISIVE MOMENT（決定的瞬間）と訳したのは、けだし名訳であった。このときからカルティエ＝ブレッソンの名は不朽のものとなり、写真を撮る人たちは「決定的瞬間」を求めて、カメラのシャッターを切るようになった。

写真集『決定的瞬間』は、アンリ・マティスが表紙をデザインし、126 枚の写真とコメント、それに「ルポルタージュ」、「主題」、「構図」などについて自説を述べた文章が収められている。

カルティエ＝ブレッソンは「主題」に関して、「重要なのは、さまざまな事実の中から、隠れた現実を示している真の事実を選び取る仕方であり、自分自身が認識したものに対して自分の立場を定めることである」と述べ、また「構図」については、「構図は必然性がないければならず、内容から切り離すことはできない」と言い、「（構図に）黄金比を適応するには、撮影者がその目ですばやく目測する以外にない」と語っている。つまり「構図」は撮影と同時に決定されるというのである。

彼は対談でも、「絵画（素描）が瞑想なのに対して、写真は射撃だ」と言い、また「モータードライブによる連続撮影やズームレンズなどを使うのは邪道だ」とも語った。事実、カルティエ＝ブレッソンにとっては、カメラの小さなファインダーの中に、黄金分割の構造が見て取れたときがシャッター・チャンスであり、その瞬間を逃さずにシャッターを切る。彼はそうした瞬間を予期して、場所と時間を選び、獲物が射程に入るのをハンターがじっと待つように、その瞬間が訪れるのを待つのである。

だがこうした写真術は、類まれな感性と訓練によって、カメラが目の延長、身体の一部にまでなった特別の人が撮る写真にこそ当てはまることなのではないのか。

繊維会社を営む裕福な家に生まれたカルティエ＝ブレッソンは、小さいときに「ブロウニー・ボックス」型のカメラを買い与えられ、それで夏休みの写真を取ってアルバムをつくったという。ただ彼の興味はすぐには写真に向かわず、当時の芸術を席捲していたシュルレアリズム運動の洗礼を受けたあと、アンドレ・ロートのもとで本格的に絵を学んだ。

詩人のランボーに憧れていた彼は、その後 22 歳のときアフリカへ渡って仕事に従事したが、病を得てフランスに帰国。マルセイユで療養生活を送っていたとき、小型カメラ「ライカ」と出会った。1931 年のことである。このときから彼は写真を表現手段とする決心を

した。機動性と速写性に富んだ「ライカ」は、絵画を描くうちに培われた構図への鋭い感覚と、シャッター・チャンスへの嗅覚を発揮するのに最適だった。ライカが持つ機能があって初めて、自らの現実認識を写真として定着することを可能にしたのである。それは文字通り「決定的瞬間」の出現であった。だがはたしてこの「決定的瞬間」は、本当に一瞬の勝負の成果なのだろうか。

カルティエ＝ブレッソンが創立者の1人であった写真通信社「マグナム」には、彼をはじめ多くのカメラマンが撮影した膨大な写真のコンタクト・プリント（べた焼き）が保存されている。上記のテレビ番組を制作する過程で、カルティエ＝ブレッソンのコンタクトの一部を見せてもらうことができたが、写真集に掲載された作品の前後にも、ほぼ同じポジションで撮られた写真がある。発表された写真はコンタクトの中から1点だけ選ばれたものののだが、ではコンタクトの意味をどう考えればいいのか。

フランスの映画監督アレクサンドル・アストリュックは、1948年に「カメラ万年筆論」を唱えた。小説家が万年筆を使って自分の思想を作品として具現化するように、映画の監督や脚本家は、カメラを使って自分の思想を表現するのだと主張したのである。

この考えは、アンドレ・バザンによる作家論という形で具現化され、1950年代末に「ヌーヴェル・ヴァーグ」が誕生する要因の1つとなった。バザンは、映画とは「その裏張りが映像をとどめておくようにつくられた特異な鏡だ」とも述べている。ヌーヴェル・ヴァーグの作家たちにとって、自分が世界を見る眼差しがフィルムそのものであり、その視線をいかにフィルムのなかに「保存」するかが問題であった。これが「カメラ万年筆」論の本質であった。

そしてヌーヴェル・ヴァーグ運動の旗手の1人だったエリック・ロメールは、「もし歴史が弁証法的なものだというのが本当ならば、保存することの価値が、進歩の価値よりも現代的である瞬間がやってくる」と語ったことがある。ここでロメールが保存しようとするのは、対峙する現実と自分とに流れる「時間」であり、保存されるものは、カルティエ＝ブレッソンのいう「消え去る映像」なのである。

じつはその点で、デジタル技術の登場が大きな意味をもつ。これは映像撮影と保存の上で大きな展開をもたらした。デジタル技術を装着した「万年筆としてのカメラ」は、ムービーであれ、スチルであれ（その最先端が携帯電話に付属したカメラである）小型化によっていわば身体と一体化され、究極の速写性と保存性を与えられたのである。これを手にした私たちは、現実に向けた自らの眼差しを、いつでも記録することが可能になった。こうして写し撮られた映像は、現実の上を一瞬に流れた時間であり、そこに成立していた私たちと対象との関係である。

さらにデジタル・カメラの簡便性と記録容量の大きさが事態を一変させた。人びとは1点きりの「作品」をつくるという意識をもつことなく現実を無造作に切り取る。こうしてデータ・フォルダーに小さな映像として保存された1コマ1コマの総体が、ある時間の経過の中で成り立っていた対象と撮影者の関係を表している。フィルムの時代には、1コマを選び出すための素材であったコンタクト・プリントそのものが、前面にせり出してきて意味を帯びてくる。そのとき「決定的瞬間」に要求された「構図」へのこだわりは減じられ

(これには携帯電話の画面が概ね縦長で、しかも 1 対 1.618 の黄金比をなしていないことが微妙に影響している) 無造作にシャッターが切られ、多くの映像が記録されていく。

携帯カメラを手に入れたことで、誰もが現実には注意深く目を向けるようになった。同時にそれは自分を見つめることにつながっている。データ・フォルダーの中に連なる小さな映像——それはまことに「特異な鏡」なのだ。

(2011-10-25 掲載)

